

---

# 恋愛しよう その4

青木弘樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋愛しよう その4

### 【Nコード】

N8188K

### 【作者名】

青木弘樹

### 【あらすじ】

恋愛に縁のない寂しい人生を送っている主人公、堤たけし。勤めていた工場も潰れてしまって、現在フリーター。さまざまな出会いはあるものの、なかなかうまくはいかない。果たして彼は、最後に幸せを手にすることは出来るのか…。

作：青木弘樹

たけしは女性に近づいた。

「あの、どうしました？」

「え？」

女性は驚いていた。

「何かお困りですか？」

「え？ええ…実は…パンクしちゃったみたいで…」

「パンクですか…」

たけしはタイヤを見てみた。

「ほんとだ。よし、じゃあとりあえずスペアタイヤと交換しましよ  
う」

「え？」

「大丈夫。僕がやりますよ」

「え、でも…」

「気にしないでください。どうせ暇人なんで。工具ありますか？」

「あの…」

「ないなら、僕が自分の車から持ってきますよ」

そう言うとたけしは工具を取りに自分の車のところへ行った。

「あの…」

女性は不安げな表情だった。

しばらくしてたけしが戻ってきた。

「さてと…」

たけしは作業に取りかかろうとした。しかしその時、

「るい、どうした？」

ある男性が女性に話しかけた。

「あ、かずや…」

どうやら彼氏のようにだ。

「どうしたんだ？」

「あのね、タイヤがパンクしてたみたいなの……」

「パンク？そうか。そういやちよつと乗り心地、変だったもんな」

……」

たけしは気まずかった。

「それで、この人は？」

男性は女性に尋ねた。

「え？えと、この人は……」

女性が話そうとしたとき、たけしが口を開いた。

「すみません。この人が困ってたようなので、手伝おうとしたんですが……」

「そう。それはどうも……」

男性は冷たい感じだった。

「あの……」

「もういいですよ。後は俺がやりますから」

「そうですか……」

「それじゃ」

男性は終始、冷たい感じだった。

「分かりました……。じゃあ失礼します」

たけしは去っていった。女性は軽く頭を下げた。

「はあ……やっぱ男付きか……」

たけしは肩を落とした。せつかくのチャンスだと思ったのに。

「あゝあ、出会いなんてなかなかないよなあ」

その後、たけしは古本屋で一時間ほど立ち読みし、帰って行った。

その夜。

たけしは村上とラーメン屋にラーメンを食べにきていた。

「いやあ、久しぶりぶり！」

村上は上機嫌だった。

「しかし驚いたよ。まさか結婚とは…」

「俺も驚いてるよ。人生って分からないもんだなあ」

村上は笑顔だった。たけしはやや笑顔だが、内心は少し落ち込んでいる。

「そうそう。ほら、これだよ」

そう言うと、村上は写真をポケットから取り出した。

「!!!」

たけしは驚いた。

「どうだ？美人だろ？」

「嘘だろ…おまえ…」

それは結婚相手の写真だった。かなりの美人だった。

「ほんと、嘘みたいだよ。我ながら」

「マジかよ…」

たけしは写真に見入っていた。

「声がまたかわいいんだよな」

「…」

たけしは思わず写真を落とした。

「おっと、乱暴にあつかうなよ」

「はあ…」

たけしは思わずため息をついた。

「はい、おまちどうさん」

そこへ、頼んでいたラーメンがやってきた。

「きたきた。さあ、とりあえず食おうぜ」

「…」

「いただきます」

村上は食べ始めた。

「…」

たけしも無言のまま、小さく手をあわせ食べ始めた。食べながら、話は続いた。

「けどマルチとはな。とんだ災難だったな」

「なんとなく、そんな気もしてたけどな」  
「昔は俺も何度か誘われたよ」  
「誰に？俺の知ってるやつか？」  
「えっと…そうそう、7、8年前に、佐久間に誘われたよ」  
「ああ、あいつか。あいつならやりそうだな」  
「当時はマルチのことよく知らなかったけど、まあめんどくさそう  
なんで断ったけどな」  
「お前の適当な性格が、役に立ったわけだな」  
「ま、そういうわけさ」  
軽い嫌味にも、笑顔でかわす村上。どうやらかなり上機嫌のよう  
だ。

間もなくして、二人はラーメンを食べ終わった。

「ふう。ごちそうさん」

水を飲み干し、やがて二人は店を出た。

「さて、じゃあまた新居に遊びに来てくれよ」

「ああ」

「たけし、出会いはきつとある。お前にもきつとな」

「ありがとう」

「じゃあな」

村上は帰っていった。

「…」

たけしは夜空を見上げていた。星がたくさん輝いている。

「出会いか…よし！」

たけしは何かを決心したようだった。

「やるしかないよな…！」

週末。たけしは思い切つて、行動に出た。

「出会いがないなら、つくりゃいいのさ」

たけしは仕事が休みの日の週末、なんとナンパに出かけていた。

まなぶの友人のやり方をそのまま真似しようというのだ。大胆なや

つだ。

とりあえず7人に声をかけて無理だったらあきらめる。そう決めていた。

なぜ7か？それはラッキーセブンの7だから。単純なやつだ。

たけしは頑張った。休みが来るたび、人の多いところへ行き、女性に声をかけた。

ほとんど無視されたが、たまに少しだけ話をしてくれる人もいた。しかし、一緒にお茶を付き合ってくれる人はいなかった。

最初のうちは気持ちが悪くて、落ち込んだりもしたが、だんだん慣れてきたたけしは、ナンパそのものが楽しくなり、変な目で見られても、だいぶ平気になっていた。人間は慣れるものだ。

そんなこんなで一ヶ月が過ぎた。しかしまだナンパは成功はしていない。

「ふう。なかなかうまくいかないな」

そんなある日の夜。

「さて…そろそろ帰るかな」

今日も収穫がないまま、日も暮れてきたので帰ろうとしたとき、あるカツプルが目に入った。

「ん？あれは…？」

それはまなぶだった。

「まなぶ君だ。ということ、あの子が前に言ってた彼女のさとみさんかな？」

二人は楽しげに話しながら歩いていた。たけしは声をかけてみた。

「まなぶ君！」

「…たけしさん」

「久しぶり、元気だった？」

「ええ、まあ…」

まなぶは少し驚いていた。

「奇遇だね。今日はデートかい？」

「え？ええ…」

まなぶは少し焦っているようだった。

「ところで…」

たけしが何かを言おうとしたとき、それを遮るかのようになまなぶがしゃべり始めた。

「涼子、ちょっとそのコンビニでタバコ買ってきてくれよ」

「え？」

「前にこの人にタバコおごってもらったんだ。お返ししなきゃ。ほら早く」

まなぶは女性に千円札を渡し、なかば無理やりコンビニに行かせた。

「？」

たけしはわけがわからなかった。たけしはタバコなどおごっていない。それに女性を涼子と呼んでいた。どういうことだ？さとみではないのか？

「まなぶ君。どういうことだ？」

「たけしさん！詳しいことは今度話すよ。実は俺、さとみとは別れたんだ」

「!？」

「とにかく今はあの子と付き合っているんだ。名前は涼子。くれぐれもさとみの名前は出さないでくれよな」

「そ、そうか…。わかった」

「そういうことでよろしく…!」

涼子が帰ってきた。

「たけしさん、はいタバコ。こないだはありがとう」

「あ、ああ…」

たけしはタバコは吸わない。しかし受け取るしかないので受け取った。

「じゃあ、またね」

「ああ」

二人は去っていった。涼子は少し納得のいかない表情だった。

「別れたのか…。結婚寸前まで行ってたらしいのに…」

たけしはタバコを見つめていた。

「まあ、そういうこともあるよな」

たけしはもつたいたいと思いつつも、タバコをゴミ箱に捨て、帰っていった。

一週間後、

たけしは深夜、レンタルしていたDVDを返しに、レンタル店に来ていた。その帰り際、

「ん？」

ある後姿のカップルが肩を寄せ合って、ふらふら歩いていた。ひとはホスト風の男性、ひとはホステス風の女性。

「…」

たけしはいちゃついている行動に嫌悪感を感じながら、借りていたDVDを返却コーナーに置いた。

そして店を出て、自動販売機でコーヒーを買おうとしたとき、そのカップルも出てきた。

「あつ！」

なんとそれはまなぶだった。しかも女性はこの間会った涼子ではない。

「まなぶ…君？」

「ん？おお！たけし先輩！奇遇ですねえ」

まなぶは酔っているようだった。

「まなぶ、お知り合い？」

女性が尋ねた。女性も酔っているようだった。

「ああ。前に働いていた会社の先輩さ。ねえ、たけしさん」

「あ、ああ…」

「そうなんだあ。私はサヤカよ。よろしくね！」

二人は完全に酔っていた。

「……」  
たけしは困惑していた。涼子という女性でもない。さとみさんでもない。まなぶはどうなってしまったのか？

「……」  
たけしは話を聞くことにした。

「サヤカさん、ちょっとまなぶ君とふたりで話があるんだ。ちょっといいかな？」

「え〜？なんか、やらしい。分かった。じゃあジュースおごってくれる？」

「あ、ああ……」

たけしは財布から200円を出し、サヤカに渡した。

「ありがとう〜」

笑顔のサヤカ。

「じゃ、まなぶ君、ちょっと……」

たけしはまなぶをサヤカから引き離れた。

「まなぶ君、いったいどうしたんだ？」

「え？なにがですか〜？」

「その格好はなんなんだ？」

「なんなんだって言われても、俺いまホストやってんすよ」

「ホスト？」

「ほら、俺って男前じゃないですか。けど今まで真面目に生きてきてかなり損してると思ったんですよね〜」

「……」

「だから、その損した分は取り戻さなくちゃ。ふふふ……」

まなぶは笑っていた。

「まなぶ君…君、まさかさとみさんに振られたのか？そのせいで……」

「さとみ？ああ、そんな女もいましたね、むかし」

「まなぶ君……」

「けっ、あいつは今頃、医者の子とよろしくやってんじゃないっすか？」

「医者の子？」

「新しい彼氏ですよ」

「まなぶ君…」

「そうそう。けいこがこの間はご馳走さまって言ってましたよ」

「そ、そうか…」

「たまに店に来ますけどね、あいっ」

「…」

「さてと、じゃあ行きますね。これからサヤカといろいろやること  
があるもんで、へへへ」

「まなぶ君…」

変わり果てたまなぶ。さとみに振られたのがそんなにショックだ  
つたのだろうか…。

「じゃあ、失礼します。お〜いサヤカ、いこうぜ〜」

まなぶは去っていった。

「…」

たけしはどうしようもなかった。何かを伝えたかったが、何を伝  
えればいいのか分からなかった。別に彼は犯罪を犯しているわけ  
はない。親友でもない。ただ残念だった。

モヤモヤした気持ちを抱えながら、たけしは静かに帰っていった。

数日が過ぎた。

「ホストか…」

たけしは、布団に寝転がり、考え事をしていた。その時、

”ピ。ピ。ピ。ピ。”

携帯がなった。

「もしもし？」

「あ、たけしさんですか？あの…けいこですけど…」

「おお。けいこさん。こないだはどうも」

「このあいだはご馳走様でした」

「いえいえ。で、どうしたの？」

「あの…まなぶ君のことなんですけど…」

「…」

「あの…」

「うん。だいたいのは知ってる。彼いまホストやってるんだってね」

「え？そうなんですか？はい、彼は今ホストやってて、何度かお店に行ったことあるんですけど…」

「さとみさんに振られたみたいだね…」

「はい。それからというもの、まなぶ君、まるで人が変わったちゃって…」

「かわいそうだね」

「それで…ちよっと今日彼の家に行ってホストやめるように言おうと思っんです」

「そ、そう…」

「それで…彼が住んでるマンションの前までもう来てるんですけど…ちよっとひとりでは怖くって…それで…」

「そうか…。分かった。じゃあ僕も行くよ」

「ほ、ほんとですか？」

「ああ。僕も気になってたし、行くよ。場所はどこだい？」

「すいません。えと、場所は…新町33のゲートマンション…!？」

「ん？ゲートマンションの何号室だい？」

「…」

” ツー ツー ツー … ”

「もしもし？もしもし？」

電話は切れていた。

「まさか…」

たけしは慌てて家を飛び出し、車に乗り込んだ。

その頃。

「よう、けいこ。どうした？」

まなぶがけいこの背後にいた。まなぶがけいこの携帯電話の通話を切ったのだ。

「まなぶ…」

「せつかく来たんだ。まあ、入れよ」

まなぶはけいこの腕を強くつかみ、自分の部屋につれこんだ。

まなぶの部屋。

「まあ、座れよ」

「…」

けいこは恐る恐る座った。

「ビールでも飲むか？」

「え？昼間っから…ビール？」

「なんだよ、別にビールを昼に飲んじゃいけないって法律なんか無いぜ」

「…私はいいよ。お茶か何かで…」

「そうか」

まなぶはペットボトルのお茶と、自分用の缶ビールを持ってきた。

「よししょつと」

まなぶも座った。その時、

”ピ。ピ。ピ。ピ。”

まなぶの携帯がなった。

「はい。おお、ミクか。元気か？」

「…」

ミク…。女の名前。けいこは気になった。

「うん…、うん…、そうか。わりい今友達に来ててさ、また後で連絡するよ。じゃあな」

まなぶは電話を切った。

「…誰なの？」

「ん？ああ、仕事の関係の人さ」

「仕事…？何で下の名前で呼ぶの？」

「名前をどう呼ぼうが別にいいだろ。それだけ仲が良かったことさ」

「なに？焼いてるの？」

「まなぶはけいこに寄り添った。」

「けいこ、かわいいね」

「けいこはうれしかったが、複雑な心境だった。」

「けいこ…」

まなぶはけいこにキスをした。けいこも受け入れた。不安だったが、やはり好きなのだ。

「けいこ…」

まなぶはけいこの胸をさわった。

「けいこは抵抗しなかった。まなぶはけいこのふともものあたりをさわった。」

「まなぶは笑顔だった。けいこはしばらく無抵抗だった。が、やめて！」

「けいこは突然、まなぶの手をふり払った。」

「どうしたんだよ？」

「こんなの…こんなの…嫌だよ」

「けいこ。俺が好きなんだろ？」

「好きだけど…、好きだけど…」

「俺も好きなんだぜ、けいこ」

「まなぶは再びけいこに近づいた。」

その頃。たけしはゲートマンションの前に着いていた。たけしは車を降り、あわてて入り口に向かった。

「どこだ…？えつと…竹内…竹内…」

たけしはたくさんあるポストを調べた。

「どこだ…、あ、あった！」

503号のポストに『TAKEUCHI』と書いてあった。

「よし！」

たけしはあわてて503号室へと向かった！

その5へ続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8188k/>

---

恋愛しよう その4

2010年10月8日15時12分発行